

山名	白馬大雪溪～白馬岳～不帰ノ剣～唐松岳縦走	CL	川原	SL	福岡
日程	25年8月26(月)～9/1(日)	気象	晴れ	報告者	鎗水(9/3 記)

参加者：川原、福岡、鎗水、間ノ瀬、國分、田中(静)、高森、(佐賀労山：山口、今泉)、(あしび山の会：田中) 合計 10 名

経		費	
収	入	支	出
9名共通費：44,000×9	421,000	マイクロバス	300,000
佐賀山口氏共通費：25,000×1	25,000	ドライバー宿泊代：7,500×2名×4日	60,000
保険6名分：500×6	3,000	ドライバー寸志：10,000×2名	20,000
		高速料金：(往)12,650 (復)12,700	25,350
		有料道路：三才山トンネル 560×2、 平井寺 200×2	1,520
		長崎ハイパス：260×2	520
		お土産：380×4名	1,380
		水：300×2本	600
		ビール：450×4本	2,200
		コピ-&通信費	3,000
		保険：500×6	3,000
	424,000		417,570
オレンジ基金：424,000-417,570=6,430			

行程・所要時間

8/27 15:20猿倉発～16:20白馬尻小屋着

8/28 06:00白馬尻小屋発～08:40葱平～10:05村営白馬岳頂上宿舎～11:35白馬岳～12:30白馬岳頂上宿舎

8/29 05:00白馬岳頂上宿舎発～8:30天狗山荘～9:05天狗の頭～11:15不帰一峰の頭～12:30不帰二峰北峰～
12:50不帰二峰南峰～12:55不帰三峰～13:45唐松岳～14:15唐松岳頂上山荘

8/30 06:00唐松岳頂上山荘発～07:50八方池～09:00八方池山荘

登山概要

当初 8/27～9/1 にかけて猿倉～白馬大雪溪～白馬岳～不帰ノ剣～唐松岳～五竜岳～鹿島鎗～扇沢まで縦走する計画であったが、筆者の高山病(食欲減退)と天候崩れの予兆で8/30唐松岳頂上山荘より八方尾根を下山した。縦走期間中は晴天に恵まれ、遠くにかつて登った青い山脈を眺めながらの3000m級の稜線歩きは感動の連続で苦しさを忘れさせるものであった。

8/27は猿倉から白馬尻小屋までの整備された道を1h、足慣らしと言ったところ。

8/28白馬尻より大雪溪に踏み出す。8/Eにつき雪溪も痩せ、淵はクレバスや空洞になっておりルートの見極めが必要。雪溪と両脇の小岩の上を半々と言った感じで上る。傾斜角は10～15°と思われるが、この季節アイゼンは不要。しかし10kgのザックを背負い4h黙々と上るのは実につらい。白馬岳は残念ながらガスに包まれていた。

8/29 今回のハイライトで不帰ノ剣を超え唐松岳までであるが、距離・時間・ピークの上り下り、その先に厳しい岩場の下降と登攀が待っている。体力・気力・技術を最も要するコース。天狗平までは杓子岳、白馬鎗のピークはあるものの登山道ははっきりしており、楽しい稜線歩きが出来る。しかしその先から長い岩場の天狗の大下りが始まり、ようやく下りたらよいよ不帰ノ剣が始まる。第一峰、第三峰は大した事はないが、第二峰北峰は思わず圧倒される。國分さんがうまくコースを探しながら先頭をいき、時間を要したが全員無事登りきった。そこから第三峰、唐松岳、唐松岳頂上山荘が見え、あと少しと言った希望が湧いてくる。夕方から雨が降り出した。

8/30 予定を変更し八方尾根を下山する。1h程は強風とガスの中(雨は降らず)を下るが、そこを抜けるとしっとりと下界の景色が広がる、八方池やお花畑を見に来るハイカーにも合うようになる。上の方は多分雨風と思われた。

概念図	問題点・反省点
<p>付属せず</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. ハプニングや好判断がいくつかあり結果オーライとなったように感じる。当初の計画は平均的な実力からするとコース・日程が長すぎたように思うが、程度の差はあれ、計画を完遂する潜在能力は持っていたと思う。殆ど標準タイムで走破している。 2. 北アルプスは岩稜帯であり、不帰ノ剣は心得のない人には困難ではないかと思われる。日頃岩の登攀や高度感になれる訓練、セルフレスキュー訓練をしておく必要性をますます強く感じた。登山をする以上基本的なセルフレスキューは年齢に関係なくマスターさせる必要あり。 3. 筆者は唐松岳頂上小屋で高山病(食欲減退)の為、その後の縦走は不可能と判断した。高度順応には個人差があり、限られた日程の中ではなかなか有効な対処法がない。登山のスタイルを縦走からピークハントに切り替えるべきかと思う。 4. 問題点ばかりではなく、白馬大雪渓や雪渓の周りにはお花畑が広がり、メンバーの目を楽しませ元気をくれたと思う。まだコマクサにもお目にかかれた。荒涼たる稜線歩きでも、遠くにこわごわ登った立山・剣岳や薬師岳、槍ヶ岳が青く見え、懐かしさと美しさに見とれた。この感動は自らの足で喘ぎながら登ったものにしか味わえないものであり、倍返しされた気分である。